

県民参加型の南アルプス地域における菌類調査

静岡県自然環境保護調査委員会菌類部会 池ヶ谷のり子

静岡県自然環境保護調査委員会菌類部会では、静岡県内の菌類相調査を行い、県内産野生菌類種の目録を作成し、その中で絶滅の危機にあると考えられる種を、県版レッドリスト (RL) に挙げ、レッドデータブック (RDB) を作成している。当部会が調査対象としているのは、菌類の中で、肉眼で確認できる大きさの子実体 (キノコ) をつくる、子囊菌門の一部と担子菌門の多くである。種の同定は、採取した子実体(含胞子)の形態的特徴、生態的特徴を調べることにより行い、DNA解析は行っていない。作成した乾燥標本 (一部真空凍結乾燥標本) は、ふじのくに地球環境史ミュージアムに寄贈させて頂いた。

生態系の中で、国内の外生菌根菌は、主にマツ科、ブナ科、カバノキ科樹木と菌根共生して栄養の交換を行って生育を助けている。菌従属栄養植物への養分供給を行っている種もある。また、ラン科植物とのラン菌根共生、腐生菌の枯木や落葉の分解酵素生産による物質循環や昆虫、土壤小動物等との関わりなど、重要な役割を担っている。しかし、キノコの分類学的研究は遅れており、既知種はまだ少ない。静岡県は海岸から富士山、南アルプスまで多様な自然環境に恵まれ、キノコの種類も多いが、子実体の発生期間が短いものが多い。毎年同じような発生をする種ばかりではなく、多く人の目で回数多く調査を行う必要がある。部会員の多くが所属する静岡木の子の会では、県内のキノコ愛好家が集い、県民参加型の調査を長年行ってきた。静岡県内で現在確認できているキノコは、1,448 種である。

大井川上流域の南アルプス田代地区は、冷温帯の山地帯から亜高山帯、高山帯と植生の変化に伴って、外生菌根菌の種類も変化し、腐生菌も暖温帯性種とは異なる種が多い。しかしこの地区へはアクセスが悪く、広大な面積に対して、調査回数が少ない。南アルプス地域産は 786 種 (田代地区では 665 種) であり、富士山では 699 種である。

助成金を頂き 8 月と 9 月の 2 回、千枚岳を通る千枚林道に計 14 名で入林させて頂いた。確認できたのは、子囊菌門 5 目 7 科 17 種、担子菌門 10 目 34 科 138 種であったが、これら以外に同定できていない種も多い。南アルプス地域で、2020 年県版 RL 掲載種は 26 種で、そのうち、南アルプス地域だけに分布するのは、15 種である。今回の調査で確認できたのは、6 種であり、2 種は確認できなかった。また、今回県内で新たに、子囊菌門ではウスゲクチキムシタケ *Ophiocordyceps* sp.、担子菌門では、ココガネテングタケ *Amanita pulchella*、カラマツカタハタケ *Phellinus chrysoloma* を確認することができた。

県民の方々に、キノコに関心を持って頂くために、2023 年 11 月 18 日～1 月 8 日に、ミュージアムで、南アルプスのキノコ写真展を開催して頂き、写真と標本を展示し、アンケート回答者には、キノコのポストカードを送付した。5 月には報告会も予定している。

南アルプス地域の調査を続け、生育環境が限られる希少種だけでなく、菌類の重要性を、そしてその保全は生態系の保全につながることを、お伝えしていきたい。